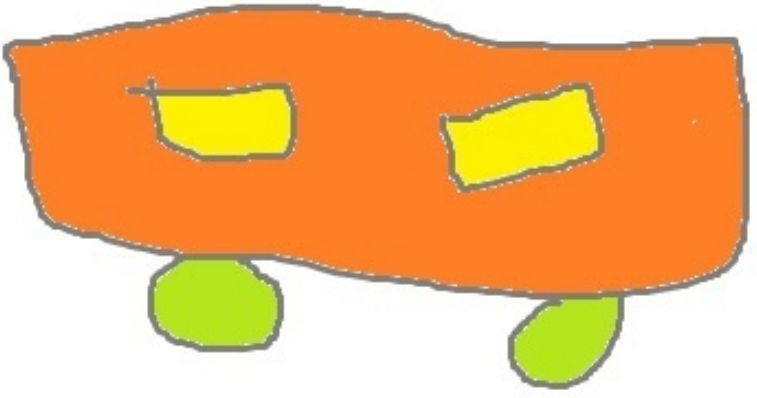
橋のたもとに何がある

短編小説集



greentea0117

橋のたもとに何がある

　橋を渡ると、隣町だった。隣町にはお店が多くて、そこに行くのが好きだった。私は橋を渡ること自体好きだった。その橋は石でできた古い古い橋だった。私はその橋のちょうど真ん中と思われるあたりで立ち止まり、水面を眺めた。時々そこを舟が通った。私は舟が水面を揺らせながらやってきて、橋の下を通り、下流に流れていくのを、飽かず眺めた。
　家に帰れば祖父母がいた。子供は私一人だったので、愛情を一身にうけた。それでも私は賑やかさが欲しくて度々橋を渡っていった。橋の向こうは私にとって不思議の国だった。買いもしないおもちゃやお菓子を飽かずながめ、ショーウィンドウの向こうの帽子を眺め、できたてのパンを眺めた。一巡して満足すると、今度は私は石を探した。石なんて自分の町にもあったけど、それでもちょっとしたお土産だ。私は自分の好きな石が見つかるまで、こころゆくまで捜し歩いた。
　ある日私はやはり橋の上にいた。水面に揺れるカモを見ていた。また舟が来た。私は手を振った。舟に乗っていた人も振り返した。舟が橋をくぐり抜けたので、私も急いで、橋の反対側に行った。驚いたことに舟は止まっていて、乗っていた人が私を見上げていた。
「乗るかい」
　私はうなずくと、大急ぎで橋を引き返し、土手へ下りた。舟に飛び乗ると、ぐらぐら揺れた。
「どこ行くの」
　私が聞くと、
「この荷物を届けに、あちこち行くんだよ」
　と船頭さんはあごをしゃくった。いろんな箱が積み重なり、ロープで船にくくりつけてあった。しばらくすると霧が出てきた。いつもなら祖父母の待つ家が頭のどこかで気になって日暮れには帰るのに、霧と共にすーっとそんな思いは消えてしまった。このままこの舟に乗って、どこまでも行きたいと思った。やがて舟は、霧の深い小さな港につけた。
「荷物をとどけてくるから、待ってなさい。舟にいるんだよ」
　船頭さんは言って、大きな荷物を両肩に乗せると、舟を降りて人ごみに消えた。私はしばらく霧の中行き交う人たちを眺めていたが、そのうち、舟に何が積んであるのか、気になり始めた。さっきから後ろで、なにかごとごとしているような気がしたのだ。私は荷物をかき分けた。錆びたかごの中に、色鮮やかなオウムがいてびっくりした。そのオウムが、かごの柵をくちばしでがっちりと噛み、がたがたとゆすっていたのだ。
「あんたどっから来たの？」
　思わず言うと、
「こんにちは、ばかやろー」

　とオウムは言った。
「あんたしゃべれるの？」
　私が聞くと、
「こんにちは、ばかやろー」
　を繰り返し、さくをがたがたとゆすり続けた。私は船の中を探って、ペンチをみつけた。それで苦心して、かごの扉の錠を壊した。扉を開けると、オウムは嬉々として出てきて、見事な羽を何回もぶるっぶるっと震わせた。私は急いでオウムをくるむように抱きかかえて舟を降りた。
「あんたとならきっとどこまでも行けるね」
　私が言うと、オウムはもうばかやろうとは言わず、首を傾げ不思議そうに私を見ていた。私は霧の中を走り出した。

月の会

　私は大きな月を見上げていました。大きな大きな月。それはふときづくと空にかかっていました。いつもは小さいのに、急に大きくなったような月。そんな夜、私は縁側に座り、いつまでも月を見上げていました。
　そんな私は家では「かぐや姫」と言われ、からかわれていました。私は、
「かぐや姫なんかじゃない！」
　と怒りましたが、しまいには小さかった弟までが、
「かぐや姫」
　と言うようになり、すっかり諦めてしまいました。
　実家を離れ、一人暮らしをするようになってもふと見上げると、大きな月が空にかかっていることがありました。
「こんなに大きな月がかかっているのにどうしてみんな驚かないのだろう」
　と思うこともありましたが、変な人と思われるのがいやで一人そう思うだけです。そしてこんなにも月が気になるなんて、私は前世は月の人だったのだろうか、それとも宇宙飛行士とか、といろいろ漠とした思いを巡らせていました。
「こんな大きな月がかかっているのに、どうしてみんな驚かないのかしら？」
　自分がついに独り言を言ったのかと思い、びくりと体を震わせると、隣に髪の長い女の子がいて、私と並んで月を見ていました。私は何と言っていいのかわからず、その子を眺めていました。そして自分は到底、かぐや姫などでは無いことを思い知りました。かぐや姫どころか、色黒で眉毛が濃くて、顔立ちだってパンが潰れたような感じです。ところがその子は漫画からやってきたかのごとく、すっきりときれいで、さっきの言葉もその子の口から出ると、ぴったりです。すっとした切れ長の目で私を見ました。
「あなた、誰？」
　私はすっかり主役の座をうばわれたような、そんな気持ちでした。あんなに、同じ思いの人はいないのかと心をさまよわせていたのに、いざいるとなると、何かが壊れてしまってもう元には戻せないような、そんな気持ちになったのです。
「誰って別に、通りがかりのものです」
　その人はぴょこっと会釈のような仕草をしました。長い髪がさらっと肩を滑ります。
「あなたもそう思うの？」
　私は聞いてみました。
「うん、いつも。もしかしたらこの大きな月は他の人には見えないのかなと思うくらい。でも私たち二人には見えるのね」

　私は素直に頷きかねて、ばかみたいに突っ立っていました。
「私ね、月に帰りたいって思うの」
　その人はずっと胸に秘めていた思いを告白するように言いました。
「それ、ほんとのかぐや姫じゃない」
　私が思わず言うと、
「かぐや姫？」
　その人は頓狂な声を出しました。
「そんな風に考えたこと無かった。そんな風に考えたら、何かいいものみたいね」
　私はふと息をつき、改めてその人を見ました。この人は私なんかよりずっと、この大きな月に囚われているのです。
「帰っちゃえばいいじゃない、そんなに帰りたければ」
　私は努めて明るい声で言いました。
「ＮＡＳＡとか見学行っちゃったりさ。天体観測のグループに入ってみるとか」
　言ってから自分でもバカみたいだと思いました。私でさえそんなことはしません。これはもっと個人的な何かなのです。
「天体観測のグループか」
　でもその人は言いました。
「いいね、そういうのがあれば」
　私は頷きました。ずっと心の中にあった何かを、同じ思いを持った誰かと共有するのは、多分、悪いことではありません。私は携帯を取り出しました。
「連絡先、教えてください。探してみます、そういう人がいないか」
　その人は連絡先を教えてくれました。末永アルエ。名前まで私と随分違う、と思いました。私の名前は鈴木幸子。いまどきあり得ない名前です。
　結局私は、天体観測のグループを探すことはしなかったけれど、アルエと時々会うようになりました。聞けばアルエは普通の会社員で、友達呼べるような人は誰もいないようでした。私も普通の会社員でしたが、友達はいたし、会社もわきあいあいとしたところでした。でもアルエに会う時は私は普通の友達とするような、美味しいカフェやテレビの話なんかはしません。ひたすら月について話し合っているのです。アルエも私もこれに関しては話題は尽きませんでした。何しろお互い、その話をできる人が今の今までいなかったのです。
「ときどき月が大きくなるとき、私はどうしようもなくもどかしいような気分になるのよ」
　アルエは言い、私は頷きました。
「月に手が届きそうな、吸いこまれてしまいそうな気持よ」
　私はまた頷きました。
「だから私はいつまでも月を見ているの。でも結局私は月に吸い込まれたりなんかしない。私はがっかりしたようなほっとしたような気持ちになって、会社に行くの。うんざりとした日常がいつまで続くのかと思う。きっといつまでも続くのね。私は月に囚われたまま、月に行くことはできず、日常に向き合うこともできずに死んでいくんだわ」

　私はアルエほど、月に囚われてはいませんでしたが、アルエの言うことはわかりました。ときにはコーヒーを飲みながら、ときには甘いパフェを食べながら私たちは話しました。

「ねえ今の話、聞こえちゃったんだけど」
　あるとき私とアルエは居酒屋でビールを飲んでいました。その日アルエは珍しく、明るい様子でした。
「それってまるで、片思いしてる人の話みたいだね」
「はあ片思い？」
　私たちの思いをそんな通俗なものと考えないでほしいとの批判をこめて、声の主を睨むと、ひょろっと細い学生がこちらを見ていました。さっきから随分うるさいテーブルだと思っていたけれど、きっと何かの打ち上げなのでしょう。ゲームをしているようだけど、その人はそれにくわわらず、こちらの話を聞いていたのです。ひょいと私たちのテーブルにうつりました。元いたテーブルでそれに気づいた人は、誰もいないようです。
「ちょっと」
　私は怒って、アルエを見ました。アルエも唖然としています。
「不思議な話だね、って言おうかと思ったけど、きみたちがあんまりシリアスなもんだから」
　学生はからかうように言いました。私は怒りだすんじゃないかと思ってアルエをまた見ました。でもアルエは普通の顔に戻っていました。
「シリアスも何も、普通の話よ、私たちにとっては」
「ふうん」
　学生は私たち二人の顔を見比べていました。
「でも僕には中学生が話しているように聞こえたけど」
　私は三度アルエを見ました。今やアルエは微笑んでいました。
「じゃああなたが私を月から引き戻してくれる？　それとも月へ連れてってくれる？」
「どっちもやだよ。でもこの月の会？　に僕も入れてくれない？」
　どっちもいやだときっぱりいうところに、アルエがこの子を気に入ったのが分かりました。アルエは私を見ました。私がうなずくと、アルエは言いました。
「名前は？」
　田中俊平と名乗った、その人は、なんだかつかみどころのない人でした。
「面倒くさくなったら、また私たち二人で会えばいいや」
　私はそう思っていましたが、俊平は私たちにすんなりなじみました。あんまりすんなりなじむので、最初は逆にそれが気味悪く思えたりもしました。
「大学ってどうなの？」
　私もアルエも大学にいっていません。こんな妙な人が、大学に行って何をしているのでしょうか。
「なーんにもない場所」
　俊平は言いました。

「じゃ、なんでそんなとこ行ってるの？」
　私がさらに聞くと、
「その何にもない具合が気持ちいいから」
　と言いました。私はふと違和感を覚えました。最初は俊平だけに対してでしたが、それはアルエに対する感情にも広がりました。
　一非生産的。
　染み出た感情が顔に現れないように気をつけましたが、
「この中で一番まともでずるいのが幸子だよね」
　と俊平が言いました。
「それはあんたなんじゃないの？」
　私が反射的に言い返すと、
「そっかー、そうかも」
　俊平はへらりと言いました。三人はしばらく黙りこみました。
「ねえいまいちわかんないんだけど」
　私は言いました。
「私たちのこと、ばかにしてんだったらさっさと行ってよ」
　俊平はじっと私をみて、
「ばかになんかしてない」
　いっそばかにしてどこかに行ってほしいという気持ちと、今更どこかに行くのは無責任だという思いが交錯しました。やっぱり一番まともでずるいのは俊平です。

「月の会、閉会にする？」
　テーブルに両肘をついて頭をのせ、私たちのやり取りを聞いていたアルエがさらりと言いました。
「閉会って、閉会してどうすんのよ」
　私は思わず大きな声で言いました。でもアルエはいつもの調子で、
「別にいいよー」
　と言いました。
「閉会ってアルエわかってんの？　月なんてないんだよ。この世に月は無いの」
　私は言いました。俊平はにやにやしています。これは面白くなったと言わんばかりです。
「ほんとにそう思うの？」
　アルエは言いました。
「じゃ、本当に閉会だね」
　私は体中に力が入っていたのですが、椅子にもたれました。しばらくの間また沈黙が流れます。
「うまくいかなくなりました。閉会します、か」
　俊平が言い、私は反射的に、
「じゃ、なにか案がある？」
　と言いました。
「もっと人を増やすんだよ」
　俊平があっさりと言いました。
「こういう会をしてるけど、来ませんかってさ」
「こういう会って……」
「月の会。月に帰りたいと思う人の会。たくさんいるでしょ。月とは限らなくても」
　アルエと私は顔を見合わせました。

ちんどん旅行

　友達にバンを出してもらい、六人乗りだったのでみんなにメールして、最初に帰ってきた四人人と旅行に行くことにした。
『バンでどこかに旅行に行きます。最初に返信してくれた四人と行きます。なおこのメールは一斉送信しています』
　返信は結構すぐに来た。案外暇な人が多いんだなと思った。自分も含め。
　当日集まった人たちは、誰なんだかよくわからなかった。何年も会っていない人とか、一回しか会ったことのない人にもメールしたのだ。でもみんな、
「メールありがとう、うれしかった」
　と能天気に笑っていた。バンで二時間ほどドライブした。知らない者同士が多かったのに、なぜかみんな打ち解けた。どうせ一泊限りの気楽な仲間だ。
夜の宴会で、
「旅行なんて何年振りだろう。行きたいとは思いつつ、手配とかが面倒で。だらかメールもらったときは即レスしちゃった」
　と言うのはいつかどこかで知り合った笹井さんだ。四十代前半、独身だ。
「旅行の手配なんてネットでできますよ」
　カニの足を折りながらそう言ったのは、カナちゃん。二十代前半。彼女が返信してくるとは思わなかった。職場の花的存在らしく、週末の誘いなんてうるさいほどあるだろう。大学の後輩だが、卒業してからは接点がなかった。
「カナちゃんが来てくれるとは思わなかった」
　私が茶碗蒸しをすくいながら言うと、
「私は先輩のメールもらったとき、あー、先輩らしいなー、と思いましたよ」
「え、どこが？」
「不特定多数の人に旅行のメールを一斉送信するところが」
「そう……」
　それのどこが私らしいのかいまいちつかめないまま、隣に座っていた本井さんを見た。彼女もうなずいていた。
「あなたくらいしかしないでしょう、そんなことする人」
「本井さん、まだ私のこと頭のおかしな女だと思ってますね」
「ええ」
　きらりと光るメガネのレンズ越しに本井さんは私を見た。本井さんは大学を卒業して初めて勤めた会社の先輩だった。能天気な学生だった私は社会に出て、右往左往しっぱなしだった。仕事

が終わらず、あげく倒れて会社を辞めてしまった。そのとき散々お世話になったのが本井さんだ。
「あんなに迷惑をかけたのに、来てもらえるとは思わなかったです」
「私もどうして来ることにしたのかわからない、気づけば返信メール打ってたのよね」
「ぶぶっ」
　本井さんの前に座っていた安在さんが笑っている。

「それなんかわかるなあ」
　安在さんにいたっては、いつかどこかで知り合った覚えすらない。そんな人にまでメールを送ってしまった自分に溜息が出る。私の前に座っているのは、バンの持ち主の角下さん。私以外、誰にも面識がないこの席で、黙々と箸を動かしている。もっともこの人は、全員が親しい集まりでもこんな感じだ。本人はそれで楽しんでいるのだ。今の職場仲間の一人だった。
　一通り自己紹介が終わると、後は皆よく食べよく飲んだ。まるでこの機会を逃したら、次いつ食事ができるかわからないというような熱心さだった。
「久留米なんかと一緒に働いて、さぞ苦労なさってるでしょう」
　本井さんが蟹の足を豪快に折りながら、角下さんに言った。鍋の野菜を器に入れていた角下さんは、
「え？」
　と、一瞬フリーズしたが、
「いや、久留米は結構いい働き手ですよ」
　と言ってくれた。自分でも今の職場では、ちゃんと働けていると思う。無駄に年齢を重ねてきたわけではない。
「そう、久留米さんも成長したのね。感慨深いわ」
　本井さんはうどんをすすりながら言った。
「久留米さん、僕とどこで知り合ったか、覚えてないでしょう」
　安在さんが同じくうどんをすすりながら言った。
「うん、ごめん、覚えてない」
「僕もよく覚えてないけど、どこか飲み屋ですよ。でも久留米さんって、もう一回会いたいなと思ってもこちらからは連絡しづらくて、連絡をもらったら嬉しくてかけつけちゃう、みたいなとこありますよね」
　安在さんは一同を見回した。カナは素直に頷き、本井さんは反応なしで、うどんをすすり続けている。
　その後、男女に別れ、露天風呂に行った。
「初対面ばっかりで落ち着かないんじゃない」
　私がカナと本井さんにいうと、
「うーん、でも私、わりと角下さんとか気になるけど」
　カナが言った。
「え？　角下さんが？」
　そりゃ悪い人ではない。むしろいい人だ。でもあんな、何か月も散髪に行ってないような、無精ひげが生えているような人のどこがいいのだろう。
「うーん、なんかおちついてる？　ような気がして」
「そりゃ……人のこのみはそれぞれだし……じゃあ連絡先とかいる？」

「ああ、じゃあもらっときます」
　本井さんは風呂に入ると、意外にスタイルの良さが目立った。
「本井さんって独身ですか？　独身の方が気楽ですか？」
　カナが無邪気さを装い、聞く。
「気楽は気楽よ。引きちぎれそうになるくらいの孤独が我慢できるなら」
　本井さんはこともなげにそう言った。
「引きちぎれそうな孤独？」
　カナは初めて真面目な顔になった。上気した顔が、ひきつっている。
「あんたには想像もつかないし、我慢もできないでしょう。かわいいうちに賢く動いて誰かちゃんとした人を捕まえることね」
　カナは鼻の下まで湯につかった。眉をきゅっと寄せている。私は本井さんより十歳ほど年下だけれど、本井さんの言うことはわかる気がする。そういう思いをごまかすために、こんな旅行を計画したのかもしれない。

つづく

　その後は、男女また合流してピンポンをした。カナと安在さんは妙にうまく、そのほかは妙に下手で、本井さんは目をつむってマッサージ椅子に座っていた。私は久しぶりのピンポンで最初はかなり夢中になったが、カナと安在さんがあまりにうまいのでそのうち嫌になって、本井さんの前に座ってぼうっとしていた。そのうち笹井さんと角下さんも退散してきた。私はカナと安在さんの間を信じられないスピードで行き交う白い玉を見ていたが、ビールを飲んでいる笹井さんに目を移し、そう言えばこの人と知り合ったのもまだ随分若い頃だった、と思い出した。
「時が経つのは早いですね」
　私が呟くと、笹井さんも同じことを思っていたのか、
「久留米さんと知り合った頃は、十年後、こんなふうに見知らぬ人たちと旅行に行くことになるなんて思いもしなかった」
　と言った。そういえば笹井さんと私は、昔ちょっと付き合っていたのだ。でもつきあったといっても、ほんの数か月のことだ。もう何が原因で別れたのか、そもそもなぜ付き合い始めたのか、全然覚えていない。
「笹井さん、結婚は？」
「してませんよ。してたら、こんなに気楽に旅行の誘いなんて乗れないでしょ」
　禿げ始めた頭、しまりのなさそうな腹。私はいったいこの人のどこがよかったんだろう？　昔はどんな顔だっただろう。私は笹井さんをまじまじと眺めたが、思い出せない。でもそれは笹井さんも同じだろう。
「二人、つきあってたの？」
　いつも寡黙な角下さんが、へらりと言った。
　次の日、寝不足で太陽の光が目に痛かった。
「それでは出発進行ー」
　角下さんが呟くように言って、バンの扉を閉めた。助手席に座った私はノーメークの顔をバックミラーに映してみた。自分で思っていたより、十歳は張りのない肌が朝日の元、露呈される。
「引きちぎれそうな孤独か……」
　何十年も前にはやった音楽が流れ出す。バックミラーに疲れた顔の面々を映しつつ、バンは首都高に向かい走り出した。